

# 今にみる、 マンション事情概論

マンションを取り巻く様々な出来事、世相を反映するようなマンションに関する話題や時事問題をテーマに、ベテランジャーナリストが独自の視点で語ります。

## Mansion Column

### マンション世代に 育てられた子どもたちに 寄せる期待

首都の学生マンション約6000戸を供給、管理運営している不動産会社の内部調査によると、最近の大学生の生活実態がよく、浮かび上がっている。特徴的な点は、①あまり酒を飲まない、②仲間を家（マンション）の中に呼ばない、③したがって、学生のマンション生活は、シーンとしていて騒々しくない——等で、マンション内での



▲マンション内での紙芝居風景：マンションの集会室での紙芝居イベント。マンション住文化は、花盛り？

クレーム・苦情が、ほとんどといていくらい無いそうで、不気味なくらいの静かさを保っているという。

団塊世代前後の50〜60歳代以上の、いわゆる「マンション第1世代」の学生時代と比べると、隔世の感。「マンション1世」は、田舎（地方）の大きな家に生まれ育ち、日本が最も美しく輝いていた高度成長時代の波に乗って、大都会に出てきた。その人たちが、

ニュータウンの団地族住まいや、狭いアパートの共同住宅住まいでの、慣れない集合マンション生活を初めて経験したものだから、集合住宅・マンションの「住まい方」を知らない。何かと仲間が寄り集まっては、「飲み会」の大騒ぎをして隣所に迷惑をかけたなり、マンション住戸内にあつては、上下階の騒音のクレームが後を絶たず、「マンション住文化」などが育つ土壌がそもそもなかったのである。

しかし、いまやマンションは、都市生活・都会住宅の中心的存在となるまでに成長・定着し、都心部では一戸建てを上回る居住形態となった。しかも、「マンション1世」に継ぐ「マンションで生まれ、マンションで育った」いわゆる「マンション2世」といわれる団塊ジュニアを含めた30〜40歳代の世代が、現在ではマンション居住者の中心の勢力となっている。マンション2世は、マンションと

いう共同生活での上手な「住まい方」をよく熟知しているので、これから「マンション住文化」が大きく育ち、歴史あるヨーロッパ都市住宅のような素晴らしい住文化の大きな花を咲かせるのではないかと、大いに期待している。さらに、そのあとに続く今の大学生世代の「マンション3世」となるとどうか——。冒頭に述べたような学生マンション生活の実態報告を聞くと、はてはて、20年後、30年後のマンション住文化は、どう変質していくのだろうか、と興味はつきない。



大越 武  
Okoshi Takeshi  
不動産ジャーナリスト

昭和43年上智大学新聞学科卒、同年日刊工業新聞編集局入社。62年南東京支局長、平成3年編集局第2産業部長、4年論説委員を兼務。8年大京入社、広報部長、12年取締役広報部長兼宣伝部長。18年（株）大越事務所を設立し、フリーライターに。現在、日本不動産ジャーナリスト会議（幹事）、上智大学不動産ソフィア会（会長）に所属。著書に『マンション力』（共著）など多数。